

# 場所の力を引き出す交通空間の再整備 に関する基礎的研究

石塚裕子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 大阪大学未来戦略機構 (〒560-0871 大阪府吹田市山田丘2-1 US1-403)

E-mail: y-ishizuka@respect.osaka-u.ac.jp

車から人へ交通空間のリ・デザインが推進されている中、「場所の質」を問う計画的志向性を持った場所のガバナンスが求められている。本研究では、大阪府藤井寺市の駅前広場等の再整備事業を対象に、場所のガバナンスのプロセスならびに成功要因について、藤井寺駅周辺まちづくり協議会の活動の参与観察調査を通じて実証的に明らかにすることを目的とした。

その結果、まちづくり協議会が既存の組織を超えた間組織的な制度的空間を生み出し、様々な市民の活動を促進していることが明らかになった。そして、協議会での議論が、市民に場所の質に興味を持つきっかけを与え、そこに技術的な工夫と多様な推進者の行動力、知識、献身的な態度が揃うことにより、事業を実現に導いたことが明らかになった。市民が関心を持ち、意味を見いだした交通空間は「場所の力」を未来に蓄えていくような場所として機能する可能性が示唆された。

**Key Words :The Power of the Place,Redesign,Citizenary Participation**

## 1. はじめに

近世以降の日本の都市は、広場から成り立っているのではなく、通りから成り立っているといわれ、都市空間の特性は街路パターンが重要視されるといわれてきた。しかし、近代都市計画における、鉄道駅を中心とする都市整備は極めて日本的な都市形態といわれ、その中心となる鉄道駅には駅前広場が計画され、街の玄関口として様々な整備がおこなわれてきた。

従来の駅前広場は、広場面積の大半をバスバースやタクシープールといった交通機能で占められており、利用者にとって殺伐としたイメージを与えるものも少なくなく、特に市民にとって“自分たちの場所”と感じさせる駅前広場は少なかったといえる。しかし、近年は姫路駅<sup>1</sup>、博多駅<sup>2</sup>など大規模ターミナルの再整備にともない全面リニューアルが行われている駅前広場では、市民参加により、街の賑わいの創出、市民の活動の場づくりをめざした広場整備が進められている。

## 2. 本研究の目的と方法

### 2.1 目的

本研究は、人を中心とした駅前広場の整備が、ドロレス・ハイデンのいう「場所の力。それはごく普通のラン

ドスケープに秘められた力である。共有された土地の中に共有された時間を封じ込み、市民の社会的な記憶を育む力」<sup>3</sup>を持つ場となり得るのではないかという仮説を持つ。そして、そのような広場の整備には、パッツィ・ヒーリーが提唱する「場所の質」を向上させる計画的志向性を持った場所のガバナンス<sup>4</sup>が必要であると考えている。そこで、本研究では大阪府藤井寺市の駅前広場再整備事業を主対象に、場所のガバナンスのプロセスならびに成立要因を検証することを目的とする。

駅前広場に関する近年の研究では、従来の交通機能の適正化に関する研究から環境空間の適正化や利用者の利用実態や意向に関する研究が増えつつある<sup>5</sup>。交通環境やまちづくりにおけるガバナンスに関する研究では、依藤らは商店街活性化の継続的な取り組みプロセスを分析し担い手の変遷を明らかにしている<sup>7</sup>。また長曾我部らは自転車交通問題を対象にコミュニティ・ガバナンスにおける社会的文脈の遷移過程を新聞記事テキストの分析から明らかにしている<sup>8</sup>。以上のように駅前広場など交通空間整備では、考慮の対象が車から人へとシフトしている中、ガバナンスの視点からいくつかの研究が行われているが、場所のガバナンスについて実践事例から言及した研究は、まだ少なく本研究は新規性があるといえる。

## 2.2 方法

### (1) 調査対象

調査対象は、大阪府藤井寺市、近鉄藤井寺駅周辺地区とする。藤井寺市は大阪市の南東部に位置する、人口約6万6千人、世帯数約2万9千世帯(2016年3月末現在)、面積約8.9km<sup>2</sup>の大阪府下で最も小さな市である。市域を近鉄南大阪線が東西方向に横断し、急行停車駅である「藤井寺駅」は日乗降客数が約3万9千人である。

藤井寺駅周辺は市役所などの公共施設が立地し、市の中心市街地である他、かつては南河内の商業核として繁栄した歴史があり、6つの商店会が形成され商業エリアが面的に広がっている。駅を中心に東西南北の4象限に、歴史的資産の集積、昭和初期の計画的な住宅団地、旧街道の集落、近代の商業地と多様な顔をもつ地区である。

藤井寺駅周辺は、市街地を東西に分断する近鉄南大阪線の高架化が地域活性化のために必要不可欠と考えられてきた。1997年から連続立体交差事業調査ならびに駅前再開発調査が行われていたが、社会情勢の変化の中で莫大な事業費の費用対効果が低いと判断し、1999年以降は検討が中断されている。

駅の北側のエリアでは2つの大規模商業施設と商店街で“2核1モール”を形成し、買い物客の動線ができていたが、大規模商業施設の一つであるサティが2002年8月に閉店した。また、藤井寺の代名詞であった藤井寺球場が2005年1月に閉場し、街のシンボルが消えてしまった。その後、サティ跡地はマンションが、藤井寺球場跡地は四天王寺大学付属小学校とマンションが建設され、これまでの商業・娯楽機能から住宅・文教機能に土地利用が大きく転換された。そのような中、2009年にもう一つの大規模商業施設であるイオンモールの建替に伴う閉店計画が発表され、地元商店街、市民、行政ともに駅周辺の活力の低下に危機感を感じていた(図-1)。

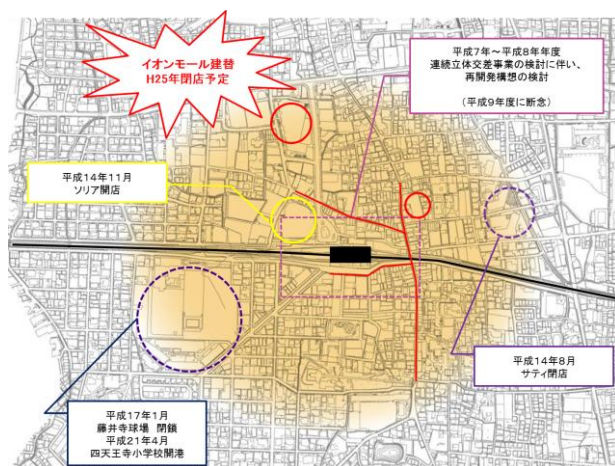


図-1 藤井寺駅周辺の変遷

### (2) 調査方法

2009年9月から2013年3月まで藤井寺市から委託されたコンサルタントの担当者として、2013年3月以降から現在までは2011年6月に設立された藤井寺駅周辺まちづくり協議会の会員として会議に参加し、参与観察調査を行った。

## 2.3 論文構成

1章では研究背景を、2章では目的および方法を述べた。3章では藤井寺駅周辺まちづくり協議会の取り組み経緯を(1)協議会設立1年目までと、(2)協議会2年目以降に分けて述べ、駅前広場等の再整備提案に至った経緯について述べる。4章では場所のガバナンスがのプロセスと成立要因について(1)整備方針決定のプロセス、(2)技術的な工夫、(3)推進者とチーム力について考察する。そして5章で結論を述べる。

## 3. 藤井寺駅周辺まちづくり協議会の取り組み

### 3.1 協議会設立1年目まで (2009.12-2012.03)

2009年にイオンモールの建替、閉店計画が明らかになり、藤井寺市は、大規模商業施設の建替を機に、当該施設の建替だけでなく、周辺の商店が連動した地域全体の活性化への取り組みが必要であると考えた。そこで、商店街を中心とした事業者との協働のまちづくりをめざそうと、行政主導で地域に働きかけを行った。

#### (1) 「活性化懇談会」と「まちづくり勉強会」の開催

まず初めに駅周辺に立地する6つの商店会の代表者による活性化懇談会(以下、懇談会)を2009年12月から3回開催した。次に、商業・業務施設が集積する区域を対象にアンケート調査を実施し、まちづくり勉強会(以下、勉強会)への公募型で参加を呼びかけた。

懇談会、勉強会での取り組み内容は表-1に示すとおり、懇談会も勉強会もほぼ同じ内容で取り組んでいる。地域の課題の意見交換にはじまり、現状の再確認、他都市の事例の学習、そして将来構想づくりである。いずれも初回は鉄道高架化事業や再開発など過去の計画に対する意見や、高齢化等による商業機能の低下など街のマイナス要因の指摘に終始していた。しかし、将来構想を自らが考える段階では、少しずつ建設的な意見に変化する人が増えていった。

懇談会と勉強会で異なる点は、勉強会で指摘された課題の一つである”イチョウ並木の剪定方法”について、行政担当者が関係部局に働きかけを行ったこと、商店街が取り組むイベントの応援として清掃活動を実施したことである。いずれも勉強会参加者の提案を受けて、行政担当者の努力により実行されたものである。

懇談会と勉強会がほぼ同じ内容を繰り返したことに

り、参加者の中には「何も進まない、市はやる気がないのではないか」、「取り組みの目的がわからない」と言った意見が聞かれ、参加者が減少傾向にあったが、他都市の協議会関係者との意見交換や上述の取り組みを通じて、一部の参加者にまちづくりに対する意識の変化や行政との信頼関係が構築されていった。

(2) 藤井寺駅周辺まちづくり協議会の設立

勉強会の協議の中で、住民、事業者がまちづくり活動に継続的に取り組むためには組織が必要と認識され、懇談会メンバーと勉強会に熱心に参加していた数名が加わり、まちづくり協議会設立準備会を設けた。2011年4月から藤井寺駅周辺まちづくり協議会（以下、協議会という。）の会員募集を、商業・業務エリアに限らず駅から500m圏内の住民、事業者を主対象に募集を行った。

協議会は2011年6月に設立総会を開催し、理事10名を中心にまちづくり活動が始まった。活性化イベント部会（ソフト面の取り組み）と街並み整備部会（空間デザインの提案活動）の2つの部会を設けている。6月から2012年3月までに、総会2回、全体会議2回、理事会6回、街並み整備部会7回、活性化イベント部会7回の合計24回の会議を開催した。活性化イベント部会は、市民まつり、四天王寺大学学園祭への協議会PRブースの展覧や学生アンケートなどを実施した。そして、2012年度は「まち歩きマップの作成」と「ハロウィンイベントの開催」に取り組むことになり、市民の主体的な活動が始まった。

一方、街並み整備部会は、部会の登録人数が多く、協議会から初めて参加する者が多かったことから、活動の当初は、再び地域の課題の意見交換を行い、鉄道高架事業の必要性や道路や駐車場の未整備など、行政への要請に意見交換が終始された。このため協議会の活動に対して失望感を示す参加者も現れた。しかし、少しずつではあるが、協議内容のレベルアップを図り、駅前広場のリニューアルについてデザイン検討を行うまでに至った。

表-1 懇談会、勉強会、協議会の取り組み

	懇談会	勉強会	協議会
実施時期	2009.12~2010.02	2010.8~2011.02	2011.6~2012.03
会議回数(報告会含)	3回	6回	24回
1. 地域の課題の共有	○ 意見交換	○ グループWS	○ 部会WS
2. まちの現状認識	○ 資料提供	○ まち歩き	○ 資料提供・検討
3. 他都市の事例学習	○ 資料提供	○ 視察会	○ 講演会
4. 将来構想の作成	○ 素案作成	○ 素案見直し	大幅改定中
5. まちづくり活動の実施	-	△ (行政主導)	○ (住民主導)

3.2 協議会2目以降 (2012.04以降)

2年目は、まちづくり提案書の作成ならびに初のハロウィンイベントの実施にむけて、イベント部会7回、街並み整備部会8回、全体会議2回を開催している。

まちづくり提案書は、勉強会から協議会での検討事項を総括し、まちづくりコンセプトを「歴史と文化が薫る暮らし・ふれあい・にぎわいのあるまち」と定め、20のまちづくり事業と3つのプロジェクトを提案した。20のまちづくりに事業の中には、長年の課題である南北連携軸の改善、強化を位置づけ、「長期的には」という注意書き付で鉄道の連続立体交差事業も位置づけている。

最も重要で短期的に取り組むべき事業として位置づけた3つのプロジェクトは、①駅北線・駅前広場の再整備、②地域の魅力再発見（イチョウ並木の再生、まち歩きマップの発行、まちづくりの情報発信）、③活性化イベント（ハロウィンイベント）である。

街並み整備部会では、まちづくり提案書の検討、とりまとめを行い、3年目以降は駅北線・駅前広場の再整備の具体的な計画について検討を重ねた。またイチョウ並木の再生をめざして、剪定方法の改善提案を行い、落ち

表-3 2012年度以降の協議会の取り組み

	2012年度 (2012.04~2013.03)	2013年度 (2013.04~2014.03)	2014年度 (2014.04~2015.03)	2015年度 (2015.04~2016.03)	
登録者数	83	83	95	95	
総会	5月12日	5月11日	5月17日	5月30日	
理事会	3回(第7~9回)	1回(第10回)	1回(第11回)	1回(第12回)	
部会	全体会議	2回(勉強会)	1回(勉強会)	1回	
	イベント	7回 (第9~15回)	8回 (第16回~23回)	5回 (第24回~28回)	5回 (第29回~33回)
	街並み整備	8回 (第8~15回)	3回 (第16回~18回)	5回 (第19回~23回)	3回 (第24回~26回)
活動	ハロウィン	10月27日	10月27日	10月24日	10月31日
	いちょうの清掃活動	2回	2回	2回	2回
	てづくり市への協力	-	2回	4回	6回
その他	<b>まちづくり提案書市長提出 (10/16)</b> 市民祭り出展 四天王寺大学学園祭出展 ハロウィン写真展の開催	女子部会の開催 市民祭り出展 四天王寺大学学園祭出展 ハロウィン写真展の開催	女子部会の開催 市民祭り出展 四天王寺大学学園祭出展 ハロウィン写真展の開催	市民祭り出展	

葉の清掃活動、季節の花植え活動を年2回継続して的实施している。2012年度には民間の緑化基金の助成を得て弱ったイチョウの植え替えとフラワーコンテナの購入、設置が実現した。

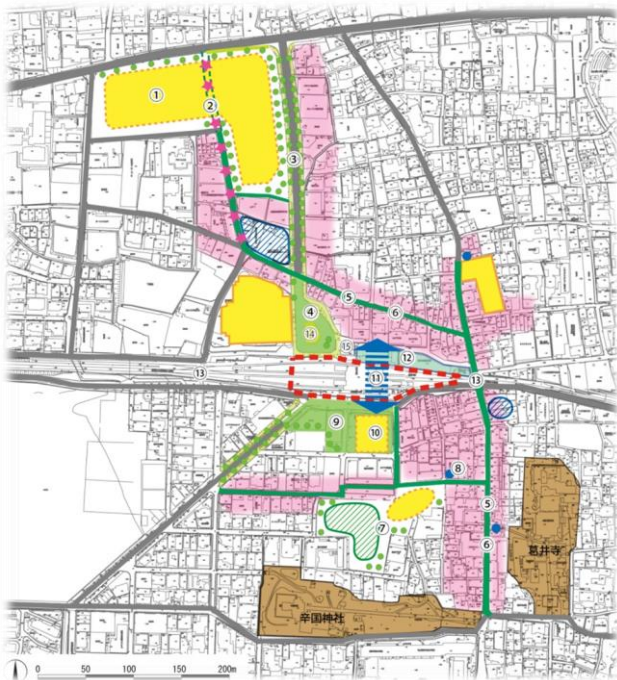


図-1 20のまちづくり事業位置図

表-2 20のまちづくり事業一覧

[ハード整備系]
①イオンモールの建替と一体となった都市基盤の再編
②買い物回遊南北動線のモール化
③駅北線（さざんか通り）の無電柱化と道路空間の再配分
④葛井寺等の観光バス駐車場と観光センターの整備
⑤買い物客回遊動線の景観づくり
⑥道路空間の美装化（カラー舗装、街路灯の改善、サイン等）
⑦駅南地区のにぎわい拠点の形成
⑧買い物客用の一時駐輪場の整備
⑨駅南交通ターミナル機能の改善
⑩駅南の顔となる空間づくり
⑪駅ナカ商業機能の拡張及び南北連絡通路の充実
⑫駅前空間（駐輪場等）の有効活用
⑬南北連携軸の改善、強化（長期的には鉄道の連続立体化）
⑭駅前広場のリニューアル
⑮駅北ポケットパークの活用
[ソフト系]
⑯地域資源の再認知と育成（イチョウ並木など）
⑰地域資源を活かした景観づくりのルール化
⑱大型商業施設と南北商店街が一体となったイベントの実施
⑲商業機能の強化、新たな魅力づくり
⑳駅ナカ商業機能の強化

\* 下線：2016年3月末現在で着手されているもの

一方、イベント部会では、ハロウィンイベント、まち歩きマップの発行、情報発信に取り組んでいる。ハロウィンイベントは、ハード整備では早期解決が難しい南北連携軸の改善、強化をソフトの取り組みで解決しようという試みである。「まちづくりは人づくり」というコンセプトのもと、駅周辺すべてを一つの会場として見立てて、子どもから大人まで楽しめる新しい祭りとして2012年から毎年10月末に実施している。参加者数、出展者数は年々増加し続け、2015年度は約2000人の人が参加し、南河内の一大イベントに育てていきたいと想いが実現しようとしている。また、藤井寺商工会とのタイアップにより「街なかバル（デラバル）」の取り組みも2013年度から始まり独立採算が取れるまでに発展している。

#### 4. プロジェクトの検証

パッツィ・ヒーリーは、場所の質とは、暮らしを取り巻く物理的環境を経験し、そこからある種の意味を見いだすことから生まれてくるものであるという<sup>4</sup>。その場所をより暮らしやすい、持続可能な場所とするためには、計画的志向性を持つ場所のガバナンスが必要となる。

計画的志向性を持つ場所のガバナンスには、政治的行為、技術的専門性、倫理的感性が複雑に錯綜して成り立つといい、人々がどのように空間を利用し価値づけるのかが重要であるという。

政治的、社会文化的、経済的、環境的な文脈が場所のガバナンスをある程度規定するが、場所のガバナンスは、より大きなテーマを継続的に考え、集団的行動の焦点を変えていく試行錯誤の連続であるという。そして、それには技術的専門性の動員が欠かせない。また、場所のガバナンスには常にチーム力が必要であり、各主体の「あいだ」で動く推進者や「間組織的」な制度的空間が必要であるという。

藤井寺駅周辺まちづくり協議会が提案し、2015年に完成した「駅北線・駅前広場の再整備事業」を対象に計画的志向性を持つ場所のガバナンスがどのように展開され、市民がどのように利用し価値付けたのかについて①整備方針の決定プロセス、②技術的な工夫、③推進者とチーム力について考察する。

##### 4.1 整備方針の決定プロセス

街並み整備部会は、部会の取り組みテーマについて2011年8月～10月にかけて3回の会合を開いて協議した。その結果、市民が集える場、活動できる場、気軽に休憩できる場など「場づくり」というテーマが抽出された。

次に第4回部会（2011年11月21日）において、「駅周辺で居場所を探そう！」という航空写真を用いたワークショップを行った結果（図-2）、駅の北側には空地が少なく、駅前広場しかまとまった空地がないことに市

民が気づき、共有された。これが駅前広場の再整備の検討に着手したきっかけである。そして第5回(2012年1月8日)、第6回(2012年3月4日)の会議において、図面を用いたワークショップで検討した結果、あまり利用されていないポケットワークと駅前広場の歩行空間を一体化すること、車の回転スペースをできるだけ縮小し、イベントが開催できるようなまとまった人のための空間を確保することが提案された(図-3)。

一方、駅前広場に接続する駅北線は、協議会設立前から市が電線類地中化事業の実施を予定していた。そこで歩道の再整備を機に、道路空間の見直しを行うことになった。協議の中で「自動車と人のどちらを優先するのか」について、商業事業者と住民とで意見がわかれ激論となった。ある店主の「商店街で買い物をする人、何度も立ち寄るような近所の住民は、車ではなく、徒歩、自転車で来ているのではないか」という意見に一定の納得感が得られた。そこで整備方針を「ひと中心の、ひとにやさしい、楽しいみちづくり」とし、自動車より歩行者、自転車を優先し、一見さんではなく住民が快適に利用できる道路空間をめざすことが決定された。



図-2 街なかの居場所探し



図-3 提案された駅前広場の再整備案

#### 4.2 技術的な工夫

整備方針の検討にあたっては、いくつかの技術的な工夫を行った。まず、駅周辺の自動車、歩行者、自転車の交差点別交通量を示し、自動車より歩行者、自転車が多いという客観的な事実を共有した。そして、一部交通規制(右折禁止の導入)を見直すことで、右折レーンを撤去することにより、車道を狭めて歩道を広げる工夫についてコンサルタントより提案を行った(図-4)。

また、駅前広場の空間構成については、協議会メンバーであり、ランドスケープの専門家であるS氏から具体的なイメージの提示や模型による検討がなされたことにより、議論の活発化、合意形成が促進された。そして、イベント部会で実施したハロウィンイベントの駅北側の会場にしようという意見があり、図-5に示すような利用のイメージが完成した。

設計の結果、駅前広場の歩行者面積は、970㎡(整備前)から1340㎡(整備後)になり約1.4倍に広がった。また、歩道は一部区間であるが、幅員3mの歩道が4.5mに拡張され広がりのある歩行空間が完成した。

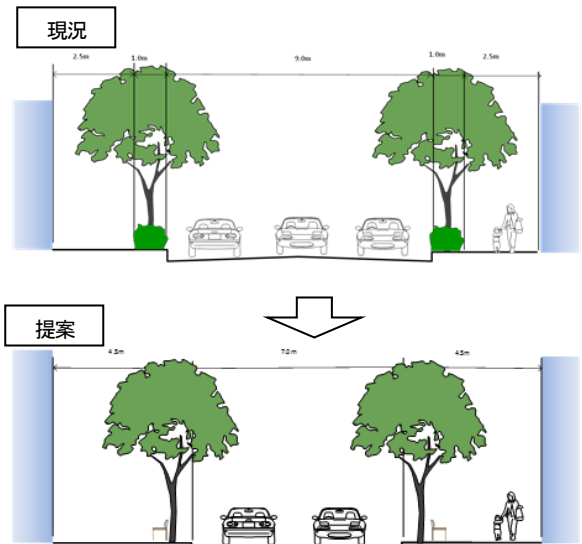


図-4 道路空間の再配分の提案



図-5 駅前広場のイベントスペースイメージ

### 4.3 推進者とチーム力

懇談会から協議会の参加者の推移は表-3に示すとおりであり、協議会設立時の会員数に対して、懇談会から継続参加者の割合は11% (7名)、勉強会から継続参加者の割合は29% (19名) となっている。協議会の理事10名中、懇談会からの参加者が5名、勉強会からの参加者が5名であり (2012年3月末現在)、協議会の先導役となった。

表-2 参加者の変遷

	懇談会	勉強会	協議会 (設立時)	協議会 (2012.03 末現在)
登録数	10名	95名	66名	81名
懇談会からの 継続者数	—	10名 (11%)	7名 (11%)	7名 (9%)
勉強会からの 継続者数	—	—	19名 (29%)	19名 (23%)

本協議会の推進者は、駅の北側の商店街の会長である協議会会長O氏 (懇談会から参加)、若手商業事業者のM氏 (勉強会から参加)、駅南側の住民でランドスケープの専門家であるS氏 (勉強会から参加)、そして市役所の担当者N氏である。

O氏は協議会設立総会における挨拶において「私は懇談会、勉強会と継続して参加してきましたが、参加当初は”まちづくり”の意味がわかりませんでした。しかし、様々な方と藤井寺駅周辺について話あったり、他の都市でのまちづくりに取り組まれている人の話を聞いたりしているうちに、住民や事業者が我がまちのことを考え、小さなことでも活動していくことが”まちづくり”であると理解しました。」と述べた。また、O氏は本協議会以外にも自治会、PTAなど様々な組織の代表も務めるが、「従来の組織からはみ出して活動できることが、新しいことに取り組みやすい。」とも語った。

M氏は、懇談会の成果報告会 (勉強会第1回) が初めての参加であった。その質疑の場においてイオンモールの建替閉店について強い危機感を訴えた。その後、勉強会に毎回熱心に参加し、協議会の立ち上げ時には事務局長を担うことになった。兼任しているイベント部会長として「どんどん動くよ」と言って、まち歩きマップ、街なかバルなど様々な取り組みを実現し、協議会の大きな推進力となっている。商工会など他組織との連携が必要な時は、協議会会長O氏に相談することで、円滑に事業を推進している。

住民であり、ランドスケープの専門家であるS氏は、アンケート調査時に行った勉強会参加者の公募に応募し、いち住民として勉強会に参加を始めた。勉強会では、自

身が住む駅南側のイチョウ通の重要性について、専門的な見地を持ちながらも、いち住民として意見を述べた。

街並み整備部会第1回では「道からはじまる藤井寺のまちづくり」と題して、専門家として講演を行った。その中で、日本を代表する造園家、都市計画家である大屋霊城による花苑都市構想に基づく斜交道路 (いちょう通り) と駅北線は街の中心軸となる通りであると解説した。その他に、広場や街路デザインについて様々なアドバイスを与え、イメージ図や模型の作成を専門家として、また住民としてボランティアで協力している。

最後の推進者はN氏をはじめとする市役所の担当者達である。駅北線・駅前広場の事業推進にあつては、庁内調整をはじめ警察協議など役所としての役割を担うことはもちろんであるが、ハロウィンイベントやいちょう通りの清掃活動、街なかバル等の取り組みでは、本来の担当部署の範疇を超えて献身的に後方支援を行ってきた。ある日、N氏は「長年こういうまちづくり活動をしたかったと思ってきた。ようやく実現しつつあり、取り組んでいて楽しい。」と語っていたことが印象的であった。

4人に共通するのは、各人にとって協議会の活動は、本来所属している組織や役割から1歩、2歩はみ出した位置での活動になっているということである。これは、パツィ・ヒーラーが言う、各組織のあいだをつなぐ「間組織的」な活動が展開されているといえる (図-6)。

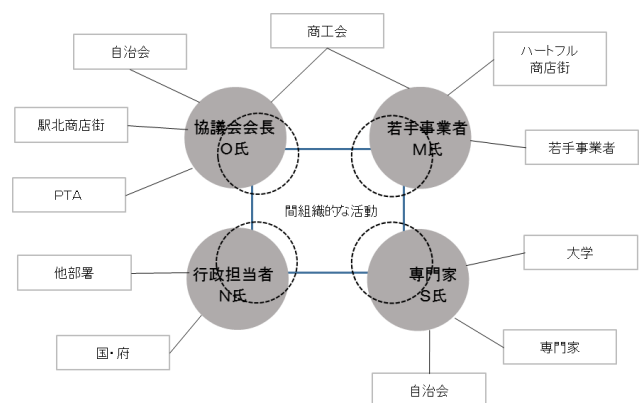


図-6 推進者の活動の位置づけ

## 5. 結論

本研究では、藤井寺駅周辺まちづくり協議会が取り組んだ駅北線・駅前広場の再整備事業を主対象に、パツィ・ヒーラーが提唱する「場所の質」を向上させる、計画的志向性を持った場所のガバナンスについて整備方針の決定過程、技術的な工夫、推進者とチーム力の3つの視点から検証を行った。

その結果、度重なる協議会での議論が、参加する市民に場所の質や空間の関係性に興味を持つきっかけを与え、交通空間のあり方について市民の実体験から検討する機

会をもつことになり、改善提案が成されるに至った。

その提案をに対して様々な技術的な工夫が施され、4名の推進者の行動力、知識、技術、そして献身的な態度が事業を実現に導いたといえる。

パッツィ・ヒーラーは「場所のマネジメントや開発が人々の共生を保障し、暮らしやすく持続性の高い場所への昇華されることは、物質的な改良がなされるというだけでなく、その場所を包含するコミュニティを育てることに他ならない。」という。

実に駅前広場完成時には、協議会メンバーが立役者となり商工会青年部主催によるオープニングイベントが実施され、図-6で示したイメージパースに近い場所が創出された(図-7)。また、来年度のハロウィンイベントの会場として、車道空間も含めて駅前広場を利用したいという計画が始まっている。

今後、駅北線・駅前広場では、さまざまな市民活動や行動が展開されドロレス・ハイデンのいう「場所の力」が未来に蓄えられていくのではないかと期待している。



図-7 オープニングイベントの様子

**謝辞：**本研究の遂行にあたっては、藤井寺駅周辺まちづくり協議会のメンバーならびに藤井寺市役所の皆さまに多大なるご協力をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。また、協議会の運営をはじめ駅北線・駅前広場の検討において京都造形芸術大学の佐々木葉二先生、大阪府都市整備推進センター(当時)の金城昌幸氏に多大なるご支援、ご指導を賜りました、心より感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 米谷啓他：姫路駅前整備の軌跡, 日本都市計画学会関西支部だよりNo28, pp10-13, 2014. 03
- 2) 森田昌嗣, 曾我部 春香, 水戸岡鋭治, 新田裕司: 博多駅博多口駅前広場, デザイン学研究作品集 17(17), pp64-69, 2012. 03
- 3) ドロレスハイデン: 場所の力, 学芸出版社, 2002
- 4) パッツィ・ヒーラー: メイキング・ベター・プレイス場所の質を問う, 鹿島出版会, 2015
- 5) 小滝 省市, 高山 純一, 中山 晶一朗, 埴 正浩: 駅前広場の環境空間の実態及び計画課題に関する研究—都市中心駅の駅前広場を対象として—, 土木学会論文集D3 (土木計画学) Vol. 71 No. 5, pp. 247-259, 2015
- 6) 岩本敏彦, 中村文彦, 岡村敏之, 矢部努: 都市鉄道における駅、駅前広場と周辺地区の一体的整備に関する研究, 土木計画学研究・論文集Vol. 23No3, pp641-649, 2006
- 7) 依藤光代, 松村暢彦: 生駒駅前商店街における中心市街地活性化の運営の変遷と継承の要因に関する研究, 土木学会論文集D3 (土木計画学), Vol. 69No. 5, 2013
- 8) 長曾我部まどか, 武吉弘樹, 榊原弘之: ユニティ・ガバナンスにおける社会的文脈の遷移過程に関する研究—自転車交通問題を例として—, 土木学会論文集D3 (土木計画学) Vol. 71 No. 5, 2015

(2016. ??. ??)

## STUDY OF RE-DESIGN IN THE TRAFFIC SPACE WHERE THE POWER OF THE PLACE IS CREATED

Yuko ISHIZUKA